

教室外での英語使用・英語学習をうながす取り組み

浦野 研（北海学園大学）

キーワード：自律学習，ライティング，スピーキング

1. はじめに

外国語の能力を高めるために、インプットとアウトプットを増やすことが重要なのは言うまでもないが、大学における英語教育では、授業時間のすべてを費やしても十分なインプットやアウトプットの機会が確保できているとは言い難い。そこで本報告では、成績評価の一部として教室外の自発的な英語使用を組み込む実践例を紹介し、授業以外にインプットやアウトプットの機会を作り出す可能性について考察する。

2. 事例 1：ライティング授業での Slack の活用

(1) 概要

本実践の対象となるのは、札幌市内の私立大学経営学部 2 年生を対象にしたライティングの選択科目である。2017 年度の履修者は 14 名で、全員が 1 年次にリーディング・ライティング必修科目の単位を修得済みである。この授業の目標は、ライティングの fluency 向上と効果的なパラグラフ作成能力の養成である。

(2) 教室外ライティング活動

先述のように、大学における英語の授業時間内では十分な英語使用の機会を確保することは難しい。そこで本授業では、特に fluency 向上を目的とした活動については授業時間外に行っている。以前の実践（浦野, 2010）では、その手段として授業専用のブログを用いてきた。Weekly Writing と名づけたブログに、担当教員が毎週トピックを提示し、履修学生はそれについて英語で 300 語程度の作文を投稿するという課題に継続して取り組むことで、自分の考えをことばに表す処理をスムーズに行えるようになることを目指した。文法や語彙選択の誤りについては指摘せず、学生同士が互いの投稿にコメントをすることによって、形式よりも意味内容に意識が向くようにした。

(3) Slack の活用

- a. Slack とは： Slack (<http://www.slack.com/>) は 2013 年に公開された、テキスト・メッセージを中心としたコラボレーション・ツールであり、ビジネスの世界を中心に利用されている。Twitter や LINE といった SNS ツールと類似するものであるが、いくつかの点で授業での利用に適していると考えて採用した。まず、Slack は専用アプリ（PC、タブレット、スマートフォン版）による利用の他、ブラウザ上でも利用可能なため、自宅、外出先やコンピュータ教室など様々な場所で利用可能である。また、通信に特殊なプロトコルを使用していないため、大学のようにセキュリティ強化を理由に様々な通信を遮断しているような環境でも利用できる。
- b. Slack 導入の理由： 報告者は 2016 年度まで、上述のブログによる教室外ライティング活動を 10 年以上実践してきた。その中で、学生にとっての主要な IT 機器が PC からスマートフォンに移行し、コミュニケーションも、ウェブやメールを介したものから、アプリケーションを利用したものが中心になってきたため、PC とキーボードを前提としたブログによる活動の維持が困難になってきた。そこでスマートフォンを中心とした SNS 利用による教室外ライティング活動への移行を検討し、そのプラットフォームとして上記の理由で Slack を採用した。
- c. 活動の内容： キーボードを使って入力するブログでの活動とは異なり、スマートフォンやタブレットでの入力が中心となるため、一回の投稿の最低語数制限をなくした。その代わりに投稿回数を増やすことで、週あたりの目標語数をこれまでと同じ 300 語とし

ている。投稿内容についても当初は自由にして、履修学生同士が互いの投稿にコメントするといった形でコミュニケーションが続いている。学期中盤からは教員が時折トピックを投稿し、それに対する投稿も受け付けている。

3. 事例2：リスニング・スピーキング授業での教室外活動報告書の利用

(1) 概要

本実践は、事例1と同じ経営学部2年生を対象にしたリスニング・スピーキングの選択科目を対象としている。2017年度の履修者は20名で、全員が1年次にリスニング・スピーキング必修科目の単位を修得済みである。この授業の目標は、リスニングおよびスピーキングのfluency向上であり、市販の教科書を使用してタスク・ベースの実践を行っている。

(2) 教室外活動

教室外でのインプット・アウトプットの時間を確保するため、授業時間以外でも英語を使う機会を見つけるよう履修学生にうながし、毎週図1のような報告書を提出させている。提出は任意だが、成績の20点分をこの活動に充てている。

1. 英語使用の種類（自己申告）。ひとつ選んで○をつけてください。
 - A. 集中した英語使用（スピーキング&リスニング）：30分あたり1点
（例：少人数で英語を話し続ける）
 - B. ゆるやかな英語使用（スピーキング&リスニング）：60分あたり1点
（例：教室外で英会話的イベントに参加する）
 - C. スピーキングを伴わない英語使用（リスニング中心）：90分あたり1点
（例：英語の講演会に参加する、英語の映画を（できれば字幕なしで）観る）
 - D. その他：換算方法は個別に判断

図1. 活動報告書（抜粋）

報告される活動内容は、図1のC（映画を英語音声で、日本語または英語字幕で見る）が多いが、学期が進むにつれAやBのスピーキング活動を行う学生も増えている。クラスメイト同士で（授業時間外に）集まって30分間英語で自由に会話したり、国際交流サークル等の活動を利用したり、Skypeで遠距離の友人と英語での会話を楽しんだりといった内容が観察される。

(3) 学生による評価

教室外活動報告書の使用について、2017年度の履修学生から意見を集めた。回答は記名式の自由記述形式で行い、「日本語吹替で観ていた映画を英語音声で観るようになった」、「意識的に英語を聞ける環境を探すことで、普段気づかなかった英語の表現を見つけられる」、「授業だけでなく、普段から英語を使おうと意識できるようになった」といった好意的なコメントが中心であった。

4. 考察

本報告では、上記2つの実践例の紹介に加え、実際の学生の活動内容や評価に基づいてそれぞれの活動の問題点を検討し、改善点を提案する。

5. 引用文献

浦野研 (2010). 「Fluency 獲得を目指した教室外ライティング活動におけるブログの利用」『北海学園大学学園論集』145, 15-30.

